

## 消えたタイムカプセル

立ち止まっては影を落とすように

少し生きては形見を創った

その形見は映画のように動くものもあれば

刻印のように焼き付くものもあつた

墨流しのように恨みがましく澱むものもあつた

漆をかけた

錆び止めを塗つた

蠟で封じ込めたり

油紙で丁寧に包んだ事もあつた

時を止め

時を閉じ込め

時にゼンマイ仕掛けをしかけて

花火の尺玉をセットでもするように

神経の繊維を紡いだものだ

容器には蓋を開ければオルゴールが鳴り

蝶番にも油を差し

軋み音など出ないように

何度も上げ下げして

最後に蓋を音もなくそつと下ろした

一つ一つの形見を重ねても

それが崩れたり互いにいがみ合ったりしない様に

接点を滑らかに触れ合うよう細工を施した

ポリの粒粒のあるシヨックアブソーバーを隙間に詰め

蓋をしてから揺すつて見ると

微かな吐息も漏れなかつた

墓守の立会いもなく

シヤベルは密やかな音を地面に語りかけた

音の水面が次第に地下へと降りていった

長方形の無の箱が出来

その冷たい底に形見達の寝棺が沈み

やがて土の抱擁にその姿を没する

あれからどれだけの時が経ったのだろうか

南に聳える檜の木と

先端に閃光が点滅する塔の方角とを結び

丁度直角を作り出す地点を

ガラス細工を掘り起こす用心深さで探つて見たが

腐蝕した棺のかけらも見出せなかった

乾いた涙の匂いが一瞬漂い

刷毛で掃くように野分が走つただけだった